

※

※

※

「どうなるんだろう・・・。」

ドレスから手を放すと、麻弥は窓の外を見る。外は相変わらず、雷鳴が鳴り響いていた。

(秀ちゃん・・・助けに来てくれるかな。)

信じられないが、自分の幼馴染は妖怪だったのだ。

それも、話を聞く限り、狐が変化した凶悪な妖怪だという。

「狐か・・・。」

先ほどのブラック・ナイトの姿を思い出しながら呟く。

(もし秀ちゃんが、猫男みたいな、狐男だったらどうしよう・・・。)

2足歩行する、けむくじゃならの狐だったら嫌だな。

いいえ、待って！・・・逆に、被り物みたいでアニマルっぽいのなら、許せるかも。

それとも、耳と尻尾だけ生えた人間みたいなのもかもしれない。

あの顔に耳としっぽがつく・・・似合いそう～！

「・・・なんか良いかも・・・。」

南野秀一の姿で、耳と尻尾をつけた姿を想像して、麻弥は1人でにやけた。

「ギィィ————！」

「ピャピャ！」

妄想に浸る麻弥だったが、2つの異なる声で我に返る。

「あっ・・・！」

そこには、自分を不思議そうに見る2匹の小さな妖怪がいた。

(やだ！私の馬鹿！こんな時に、なに考えてるの～！)

今のにやけ顔、この子達に見られちゃってるよ・・・絶対！

焦る麻弥とは対称的に、2匹は互いに顔をあわせるとなにかささやきあう。
紙とペン、羽音を立てて麻弥の側から飛び立つ。
そしてすぐに、荷物を抱えて戻ってきた。

「ギィイ！」

「ピャ～！」

「え・・・なに？私に？」

2匹が持ってきたのは、テーブルの上にあったケーキの盛り合わせだった。
切り分けられた数種類のケーキと匂いが、麻弥の空腹を誘った。

(そういえば・・・最後に食べたのはおつまみのチーズだけ・・・。)

「ありがとう、持って来てくれたんだね？」

麻弥の言葉に、2匹は顔をあわせると、ケーキの皿を窓際に置く。
そして、再び飛び立つと、今度はティーポットとカップを持ってきた。

「あ・・・飲み物まで。」

驚く麻弥の目の前で、2匹は器用にカップへと飲み物を注ぐ。

「良い香り・・・。」

(なんだろう・・・蜂蜜みたい。)

満杯になったカップをペンが、麻弥の元へと運んでくる。

「ありがとう。あなたとても賢いのね？」

ニッコリと笑えば、ペンは照れたように赤くなる。そのペンを押しよけるように姿を現す紙。そして、小皿に取り分けたケーキを、フォークで一口大にした物を麻弥へと運ぶ。

「すごい！あなたも賢いわ。」

紙に同じ様に笑いかければ、紙も目の下を赤くする。

「さてと……。せっかく2人が用意してくれたから、みんなで食べようか？」

好待遇に満足した麻弥は、ニコニコしながら2匹を誘う。
すると、2匹は驚いたように顔を見合わせた。

「どうしたの？お腹すいてないの？」

「ギイイ……。」

「ピイ……。」

「あ、そっか。あなた達のカップがないわね……。」

そう言って立ち上がると、テーブルに向かう麻弥。それを慌てて追う2匹。

「これでいいかなあ……。」

少し小さめのカップを2つ手に取ると、窓際へと戻る麻弥。
そして、2匹がしたように、カップに飲み物を注いだ。

「おいで！一緒に食べよう。」

手招きする麻弥に、2匹は何度も顔を見合わせながら近づく。

「……ピャ。」

「ギイ……。」

(この子達……私を怖がってるのかしら？)

可能性はある。先ほどまでブラック・ナイトの家来だったのなら、私が彼と同じことをすると思っているのかもしれない。

(私とあいつは違うって、教えなきや……！)

「もしかして甘い嫌い？でもこれは、そんなに甘くなさそうよ？」

優しく言う麻弥に、しばらく彼女を見つめた2匹。

「一緒に食べましょう。それとも・・・私を太らせて食べる気〜？」

「ギィイ！」

「ピャ！」

大きく横に体を動かす2匹に、麻弥はニッコリと微笑む。

「じゃあ、私とティータイムよ！あのテーブルの食べ物、食べつくしましょう！」

「ギィイ！？」

「そうよ、私達3人で食べるの。遠慮なんていらぬわ！黒夢とかブラック・・・なんとかって妖怪が、ぜん〜ぶ、面倒を見てくれるんだもん。」

「ピャ・・・！？」

「私が責任を持つわ。あなた達を守ってあげる！だから仲良くしましょう。」

そう言って、両手を差し出し、それぞれを優しく撫でる麻弥。

彼女の態度に驚く2匹だったが、ゆっくりとケーキにかぶりつく。

「ほら〜やっぱりお腹すいてた！」

2匹が食べるのを確認すると、楽しそうに笑う麻弥。そして彼女もケーキを口に入れた。

「美味し〜い！ねえ、これも美味しいよ！」

そう言って食べる麻弥に、2匹も夢中でケーキを頬張る。

「美味しいねえ〜」

「ギィイ〜！」

「ピャ〜！」

麻弥の言葉に、2匹は声を合わせる。途中で、飲み物を飲み、ついでもらったり、ついであげたりしながら食事ならぬおやつを堪能した。